

団体名

公益財団法人 滋賀県国際協会

助成金名：多文化共生のまちづくり促進事業

事業費総額 1,110千円

事業名

次世代人材育成事業 『多文化共生×SDGs×開発教育』

概要

県内の高校生、大学生、現職教員を含む社会人を対象に、座学やフィールドワークなどSDGsの視点を取り入れた連続セミナーを実施。セミナーでの学びを生かしたアクションプランについて受講生による発表会を開催した。

## 事業のポイント

- ◇ 座学やワークショップ体験、フィールドワーク等を通して、若者たちが地球的・地域的課題に関心を持てるよう、また多様な人々と共に多角的な視点で学び合えるセミナーとしたこと。

## 事業の背景・目的

- ◇ ますま進む地域の国際化・多様化に対応するため、地域住民に向けて、国際的な社会情勢の理解や多角的な視点からみる歴史認識、多様な宗教についての理解、高い人権意識の涵養などに向けた教育的アプローチの重要性が増す中、その実践者（後継者）を増やしていくことが課題となっている。
- ◇ 今後、SDGsの理念のもと、持続可能な社会づくりや地域の活性化に向けて実際に行動できる次代を担う人材を育成することを目的とした。



世界がもし100人の村だったらワークショップ



ブラジル人学校の生徒たちとの交流

## 事業の詳細

### (1) プログラム検討会 6回開催

「国際教育研究会 Glocal net Shiga」と内容を検討、下見などを重ね、各回のファシリテーターも同メンバーが務めた。

### (2) 連続セミナー 全6回

#### 第1回 参加者同士の新たな出会い（大津市）

受講生：18人 サポーター：7人

在住外国人の状況についての説明、自己紹介アクティビティ、ミニ講義「開発教育」、ワークショップ体験「世界がもし100人の村だったら」など

#### 第2回 ブラジル人学校の生徒との出会い（東近江市）

受講生：14人 サポーター：4人 ブラジル人学校生徒：19人

準学校法人日本ラチーノ学院訪問

ブラジル人学校の生徒と「貿易ゲーム アレンジ版」体験、ブラジル給食の体験、校内見学。その後、参加者のみで「ファシリテーターとして大事なこと」「異文化交流の企画を行う際に気をつけること」についてふりかえり

#### 第3回 紛争問題を抱える国・地域出身者との出会い（大津市）

受講生：17人 サポーター：6人

【午前】ワークショップ「難民・避難民について」

《講師》（公財）アジア福祉教育財団難民事業本部関西支部 支部長代行 中尾秀一さん

【午後】内戦や戦争状態にある（あった）国から日本で暮らす方たちとのフリートーク 《ゲスト出身国：シリア、ミャンマー、スーダン》

#### 第4回 日本に根づく韓国朝鮮の歴史と今との出会い（大津市）

受講生：16人 サポーター：7人

【午前】滋賀朝鮮初級学校訪問 授業見学、校長先生からのお話

【午後】渡来人歴史館訪問 専門員によるガイドツアー、講義

#### 第5回 ムスリム（イスラム教徒）との出会い（東近江市）

受講生：18人 サポーター：6人 イスラム教徒の皆さん：約30人

モスク アン ナール能登川訪問

礼拝見学、宗教的価値観、モスク設立の経緯の説明、インドネシア料理を通じた交流、男女に分かれてインタビュー、ふりかえり

#### 第6回 講演会および発表会（大津市）

受講生：17人 サポーター：3人 来賓：20人（うち、6人オンライン参加）

講義「これからの多文化共生を知る・考える」

《講師》（特活）多文化共生リソースセンター東海 代表理事 土井佳彦さん

グループ発表「アクションプランについて」

来賓との交流 グループ発表後に交流の時間を設けた。

修了証授与、ふりかえり

### (3) 報告書の発行

印刷およびHPで公開 <https://www.s-i-a.or.jp/references/851>

【事業実施における工夫点】

- 様々な経歴を持つ参加者が一堂に会するよう声かけを行い、ワークショップ等で学び合いを可能としたこと。  
**受講生** 20人（うち、19人が修了）  
 県内高校生、大学生、現職教員含む社会人。中には、海外ボランティア経験者（ブラジル・エクアドル）、中国出身者を含む。  
**サポーター** 8人  
 滋賀県国際交流員（カナダ・ブラジル出身）、留学生（中国・マレーシア出身）、外国にルーツを持つ社会人（中国・ブラジル）。
- 県内に暮らす外国にルーツを持つ人々の背景も様々であることから、朝鮮半島にルーツを持つ人々との歴史的なつながりを学んだり、ブラジルルーツの人々、インドネシアを主とするイスラム教徒の人々、そして難民・避難民となっている人々等と直接言葉を交わすことで、自らの周りに多様な人々が共に暮らしていることを実感してもらえきっかけづくりを行ったこと。
- 受講生の集め方としては、今まで関わってきた人たちの協力を得て、広報活動を行った。実際に参加した受講生は、知人や協会からの紹介をきっかけとする受講生が多くいた。

【事業の成果等】

以下のような行動を起こした修了生が出てきた。

- これまで大学内の留学生と距離を持っていたが、自ら話しかけて一緒に昼食をとる仲になった。
  - 現職教員たちが、このセミナーでの学びを基に授業の実践や新たなプロジェクトの企画をされた。
  - 県と当協会が共催した災害時外国人サポーター養成講座に数名が参加。
  - 開発教育に関心が芽生え、認定 NPO 法人開発教育協会の教材プレゼントキャンペーンに応募。
  - グループで SNS（インスタグラム）のアカウントを立ち上げ、多文化共生に関するニュースを発信。
  - 地域の日本語教室にボランティア登録をした。
  - 国際教育研究会 Glocal net Shiga の例会に参加。
- など



滋賀朝鮮初級学校での授業見学

今後の課題・（コロナ禍の状況を踏まえた）将来に向けての展望等

今回受講した若者たちには、内面の変化に留まらず、ますます多様化する地域社会やあらゆる距離が縮まる国際社会において、SDGsのスローガンである「誰一人取り残さない」世界、「すべての人がより良い生活を送れる」社会を共につくるため、これからも学び続け、活躍の場を広げ続けてもらいたいと期待する。そのために当協会は、今後も体験的に学ぶ機会や活動の機会を提供しながら、次代を担う人材を地域に増やしていきたいと考えている。

また、多文化共生などの分野に関心を持つ若者が出てくれば、セミナー終了後も継続してフォローアップしていくことで、こうした教育活動を普及する側の人材（ファシリテーター）を持続的に育むことや、新たなオリジナル教材を生み出すことなどにつなげていきたい。



ムスリム・ムスリマへのインタビュー



モスクでの記念写真



グループ発表の様子

事業担当者のふりかえり

- 課題となっていた国際教育や多文化共生の社会づくりにおける若い担い手の育成について、以前より構想は持っていたもののコロナ禍でしばらく開催を見送っていたが、ようやく実施することができ、また修了した若者たちが個々のレベルで何かしら新しい一歩を踏み出してくれていることを大変うれしく感じている。
- これまでの人脈を生かし、今回のセミナーが無事に開催できたこと、そして、修了生だけでなく、フィールドワークを受け入れてくださった方々などからも高評価をいただけていることに感謝している。